

東アジア近現代の概念編制史研究の現在

鈴木貞美

序

1970年代より、生産力主義は地球資源の枯渇を招くこと、また地球環境問題が浮上し、人類の存続には生物全体の存続が不可欠であることなどが国際的に合意されてきている。問題それぞれに議論が必要だが、西欧近代が生んだ科学技術による自然支配と人間中心主義を根本から問いなおさなくてはならないことはまちがいない。ヨーロッパ中心主義からの脱却をヨーロッパの学者たちが呼びかけて、すでに久しい。「近代」の価値観から自由な、新たな知・情・意のあり方、すなわち脱人間中心主義（ポスト・ヒューマニズム）が学問全体に問われている。にもかかわらず、教育研究制度の根本からの立て直しの方策は明確にされていない。そのためのひとつの方法として、わたしは東アジア近現代における知的システムと、それを支えてきた価値理念をあわせて検討することを提案してきた。なぜなら、東アジアは、ヨーロッパ近代の知を受容しながら、それぞれの地域の文化的・歴史的諸条件により「伝統」を再編し、新たに独自の知のシステムと価値観をつくり出してきており、それらを考察して、はじめて東アジアとヨーロッパの「近代」とを比較検討するからである。

ヨーロッパの知的システムの研究は、フランスのミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-84）がフランス19世紀について、権力機構に対応した言説（discourse）について行ったものが知られている。また、イギリスのレイモンド・ウィリアムズ（Raymond Henry Williams, 1921-88）の『キーワード』（*Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*, Fontana Communications Series, London: Collins, 1976; New edition, New York: Oxford University Press, 1984）は英語の基礎概念の変遷を追った仕事であり、ドイツではラインハルト・コゼレック（Reinhart Koselleck, 1923-2006）らによる概念の変遷を社会史と関連づけた仕事も知られる。だが、ヨーロッパ近現代の概念の歴史の変遷に関する研究を、東アジアの近現代のそれに適用することは困難である。なぜなら、繰り返すが、東アジアでは19世紀中期から20世紀にかけて、ヨーロッパ近代、とくに英語圏の諸概念を受容しつつ、伝統的な諸概念を再編し、独自の近代的な概念体系をつくり出してきたからである。その独自性の解明を前提にして、はじめて近現代における概念編制の再編過程も解明できる。その解明には、受容したヨーロッパ近代の概念編制と伝統的概念編制の双方にわたる研究が不可欠である。また、ヨーロッパ近代の諸概念はまず、19世紀前・中期に中国南岸部（広東十三行・香港・上海）で翻訳され、それが幕末から明治期を通して、日本で再編されたものが、

中国・台湾・朝鮮半島に再分配されるコースを主要な流れとする、きわめて複雑な過程をたどっている。

近代の知的システムの代表例として、日本の総合大学制度について見るなら、東京大学は1867年に「法・理・文・医」の4学部で創設され、1886年にそれを再編して創設された帝国大学は、上記4科の大学に工科大学を加えた編制をとり、さらに3年後に農科大学を設置した。これは当時の総合大学（university）としては、国際的に稀な構成だった（カレッジ方式にも見えるが、文部省の一元的な統率下に置かれていた）。

第一に、ヨーロッパの大学制度の根幹にあったキリスト教神学部をもたなかったこと。当初、1872年の学制では、大学に、欧米の大学の神学部に対応する皇学（皇室の学問）と、漢学による「教科」を設けることが構想されていたが、皇学派と漢学派が激しく対立するうちに、1886年に洋学系の学問所を集めた東京大学がつくられたため、その姿はなかった。そのかわりとまではいえないだろうが、（はじめは法・理・文の3学部、1881年には医をふくむ全学の）東京大学総理に就任した加藤弘之は、1882年、和漢の古典研究を専門とする古典講習科（3年制）を設置した。1886年に帝国大学が創設され、古典講習科は廃止に向かうが、ここを卒業した落合直文らは、皇国史観による国文学の教育や出版にかなりの力を発揮した。帝国大学では1905年、文科大学哲学科内に宗教学科を設置し、姉崎正治によって比較宗教学が講じられるようになった。欧米では、宗教学はキリスト教神学に付随し、神学者によって行われるのがふつうだから、このことも国際的に見て独自の制度である。これは知の編制としては、日本の人文学が神・儒・仏に代表される東アジアの「宗教」を内包して進展したことを意味する。

第二に、工科大学・農科大学を備えていたことである（これについては、のちに述べる）。この帝国大学制度をもとに、日清戦争後、京都帝国大学が設立され、帝国大学令（1886年）により、東京・京都・東北・九州・北海道の五帝大になり、その内部編制は1893年の北京大学創設にも参考にされた。また1918年の大学令により、京城・台北（ともに規模は縮小）、大阪・名古屋の各帝大が設立された。そして東京帝大の各分科大学は1919年にそれぞれ法学部・医学部・文学部・工学部に名称を変え、法科大学内に置かれていた経済学部が独立した（ただし、「満洲国」の建国大学は異なる編制）。

なお、20世紀後半には欧米の総合大学でも神学部が廃止され、人文学部に移管されるなどの動きが起こる。また1970年を前後して、情報工学の必要から工学部をもつことが当然のようになった。それゆえ今日のみで眺めると、この20世紀前半の日本の帝国大学の編制がきわめてユニークなものだったということがピンとこないだろう。この例に限らないが。

なお、ここで、概念は一般に流布していることばの意味をいい、創始よりも、定着が問われる。公の機関の用法や広く用いられている辞書・教科書・出版物における流布を参照することが必要になる。また、あるひとつの概念の上位（その概念が内包されるジャンル）、同位（横並びの関係のジャンル）、下位（内包する諸ジャンル）の関係が編制（システムないしネットワーク）で、それを把握して、はじめて当該概念の位置を知ることになる。

1 日本の「文学」概念

1-1 「文学」概念の転換

清朝末期の中国から医学を志して日本に留学した魯迅^{ろしん}は、人の心の大切さに気づいて文学の道を歩みだし、帰国して文学近代化運動に大きな力を発揮したことはよく知られる。その魯迅はエッセイ「門外文談」（1934年）で、近ごろの新しがり屋が古典を呼ぶのに用いている「文学」という呼称は「文学は子游^{しゆう}、子夏^{しか}」から切りとってきたものではなく、日本からの輸入品であり、英語“literature”の翻訳なのだ」と皮肉たっぷりに書いている。「文学は子游、子夏」は、春秋戦国時代（西暦紀元前3世紀まで）の孔子の言動を書きとめた『論語』先進編に出てくることば。弟子たちの特長を「德行」は誰それ、「言語」は誰それ、「政事」は……と並べ、最後に「文学」は子游と子夏が優れているといったという。「言語」は弁舌を指し、それに対して「文学」は、多くの文章によく通じていること、「文の学」「文章博学」という意味である。少しのち、職工集団の思想を記した『墨子』にも、「言談」に対して「文学」と出てくる。その後、時代によってニュアンスは変化しても、この基本は変わらない。

1900年から02年にかけてイギリスに留学した夏目漱石は、東京帝国大学文科大学（のち文学部）の英文科で、イギリス流の小説の成りたちを講義し、それをまとめた『文学論』（1907年）の序文で「漢学^{いわゆる}に所謂文学と英学に所謂文学とは到底^{どうてい}同定義^{もど}の下に一括し得るべからず」と述べた。ここでいう「定義」は、個々人の考えや時代思潮を超えて、ひとつの文化圏で一般に通用してきた概念のことである。

漱石の「英学に所謂文学」、魯迅が日本から輸入したという「文学」は、われわれがふつうにいう「文学」、今日の辞典に記されているのと同じで、文字で記された言語芸術、詩・小説・戯曲や感情表現を主とした随筆を範囲にしている。それ以前、やはり中国から日本に留学した梁啓超^{リヤンチーチャオ}や王国維^{ワンクオウエイ}らも、その「文学」概念を知っていた。王国維はそれによって、民間で楽しまれている『紅樓夢』（18世紀中期）や宋元時代の戯曲をはじめ取り上げ、中国で最初の近代批評『紅樓夢評論』（1905年）や『宋元戯曲考』（1912年）を書いた。つまり、「文学」の伝統的意味は明治期日本で転換したことになる。

1-2 和歌も物語も「文学」でなかった

日本において「文学」は、古代から儒学を主に『老子』『莊子』などの道家思想や仏教などをふくめ、中国から渡ってきた教えや漢詩を指している語だった。だから、明治になるまで「日本の文学」という概念はなかった。和歌も物語も「文学」と呼ばれたことは一度もない。まだ例外も見つかっていない。それほどその習慣は強かった。が、明治期に英語“literature”の概念を受け入れ、和歌や物語を「日本の文学」と考えるようになった。中国でも日本でも、古代から「文」は、世の中を治めることと密接に関連し、「文学」は經典を研究し、藩校などで儒学を講じる先生を呼ぶのにも用いられた。とくに宋代に興っ

た朱子学——科挙（官吏登用試験）を支えつづけた学問体系——では、立派な文章体のもので「文」とし、民間で楽しまれる白話（口語体）で記されたフィクションや噂話の類は価値の低いものと蔑んだ。それに対して、明代、16世紀後期の思想家、李卓吾は、価値観の転倒を狙って、白話で記された『水滸伝』などを「文章中の文章」と絶賛、水滸の盗賊たちこそ国を思う忠義者と説いた。が、彼の考えが大きな勢いをもつようになると、捕えられ、獄中で数え76歳で自害した。のち1930年代に、民衆の解放を説いた近代思想の先駆者と評価され、その影響を受けた人びとをまとめて「陽明学左派」と呼ぶようになる。江戸後期に『南総里見八犬伝』などを著し、明治期にも人気のあった曲亭馬琴も、民衆に読まれる「読本」こそ「物の本」（立派な本）といった。馬琴は李卓吾の『忠義水滸伝』序などを勉強し、小説の書き方について議論していた。が、馬琴は捕えられなかった。中国と日本では価値の秩序がちがっていた。

1-3 芸術の一分野に

英語“literature”の狭義は、詩（poetry）や小説（novel, roman）、戯曲（drama）、感情表現を主とする随筆（essay）など、文字で書かれた言語芸術（literary art）を指す。この用法は一般に、1770年代のイタリアからはじまり、19世紀を通じて全ヨーロッパで定着したとされている。が、19世紀中期のフランスには、「想像的な虚構の文章」を“literature”と呼ぶのは、新奇で曖昧だと非難する有力な知識人たちがいたという。イギリスでは、近代市民（ブルジョワ）社会で盛んになった小説の価値を「芸術」として認め、大学でイギリス文学を研究教育の対象にしたのは20世紀はじめのことである。そこで、ヨーロッパでこの狭義の用法が定着するのは、19世紀後半から20世紀はじめにかけてと見られる。

日本で1899年に刊行された芳賀矢一『国文学史十講』は、これまでの「日本文学史」は学問全体を対象にしてきたが、自分は「作られた美術品を指して文学と云う」といい、「美文学」と呼ぶ。「美術品」というのは、そのころまで詩や小説・絵画・音楽・舞踊などをひっくるめて「芸術」や「美術」（日本で明治初期につくられた語）と呼んでいたからだ。ともに英語“fine art”の訳語である。そして、1906年、はじめて狭義の「文学」による明治文学史、岩城準太郎『明治文学史』が編まれる。文化のちがいを無視し、西欧の文芸思潮史で日本の動きを論じている。また1910年、文部省がフランス式に絵画や彫刻に絞った「美術」展覧会を開いた。こうして、狭義の「美術」と狭義の「文学」は横並びの関係になり、はっきり定着した。

ただし、旧制中学や高校の漢文の教師のあいだに、伝統的「文学」概念が存続し、一般には広義の「文学」が生きつづけた。1926年暮に予約募集を開始する改造社の円本、「現代文学全集」は小説中心だが、広義の「文学」概念に立っていた。企画にかかわった木村毅が、そう明言している（『丸善外史』1969年）。1930年代においても、『大菩薩峠』でよく知られる中里介山は、「聖者を描ける文学」（1935年）で、伝記を「文学」の範疇に入れている。この広義の「文学」の用法は、第二次世界大戦後も、とくに比較文学・文化の分

野では生きていた。

1-4 文学と芸術

ところが、「文章博学」を意味する漢語「文学」と、広義には「著作一般」、狭義には「言語芸術」を意味する英語“literature”の、意味範囲はかなりズレている。どうして、それらはたがいに翻訳語になったのか。もうひとつ不思議なことがある。今日のどんな「日本文学史年表」にも、最初に『古事記』『日本書紀』『風土記』が載せてある。『古事記』の大部分は古代神話、『日本書紀』は神話と歴史、『風土記』は地誌の書である。日本で最初の「日本文学史」を名のる三上参次・高津楯三郎合著『日本文学史』（1890年）から、そうである*。「日本文学史」は宿屋の台帳などまではふくまないから、この「文学」は英語の広義（著作一般）と狭義（言語芸術）のどちらでもない。このような「文学」の用法については、漱石も魯迅も何もっていない。先の芳賀矢一は、これまでの文学史は学問一般をあつかってきたといていたが、三上参次らの『日本文学史』は、天文学などをふくんでいない。では、「日本文学史」の「文学」はどうしてできたのか。

*三上参次・高津楯三郎合著『日本文学史』上下二巻（1890年）は、総序に見られるように「文学」概念とその範疇にかなり意識的で、西欧各国の一国文学史が自国語で書かれた作品のみを対象にして編まれていることをよく承知しながら、「従来、国学者が和文を誇張せしは唯、我古文学を以て、之を支那文学に比較せし上のみの事なれば、其比較の区域甚狭し」と批判し、「諸般の文学を総括して、これを我国文学の全体とし、之を西洋各国の文学と対照比較する」立場を明記している。また、西欧では言語芸術の観念が主流になっていることを受けとめながらも、「美文学」とともに「歴史、哲学、政治学等の如き、所謂理文学」をあわせて日本の「文学」とする立場を明確にしている。「美文学」は感情の表出を目的とする芸術としての「文学」の意味で、「純文学」の語も用いている。これはドイツ語にいう“schöne Literatur”“wissenschaft Literatur”の区別を参照したものらしい。すなわち、「文学」の範囲をヨーロッパの「人文学」に相当するものとした（ただし、ヨーロッパ人文学はキリスト教神学を排除するが、日本の「文学」は神・儒・仏の聖典を排除しない）。これが、その後の「日本文学（史）」の範囲の大枠を決定したといてよい。

ただし、その態度はいささか揺れを見せ、総序のうちに「漢文は凡て之を採らず。但し其国文学と関係せるところは固より之を明らかにせり」ともある。実際のところ、上巻では『古事記』『日本書紀』から万葉仮名方式で記された歌謡類を率先して載せ、言語芸術の立場を尊重する姿勢を見せているが、『出雲国風土記』の国引きの一節（原文は崩れた漢文）を読み下し体で載せ、下巻（鎌倉以降）では、儒学を重視し、新井白石の漢文も引いている。上巻と下巻ではやや構えも文体もちがいが、全体を当時、帝国大学文科大学史学科教授、三上参次が構想し、大学院生だった高津楯三郎（1890年、一高教授に就任）が上巻の執筆を、三上が下巻を担当したと推測される。

その謎を解く前に、「芸術」の意味の変化にふれておこう。中国でも日本でも、「芸術」は長く技芸一般の意味で用いられていた。幕末の先覚者、佐久間象山が遺した「西洋芸術、東洋道徳」（西洋は技術に、東洋は道徳に優れている）ということばはよく知られる。ヨー

ロッパ語の“art”は、古代ギリシア語起源で、もとは技芸全般を意味していた。

美しさに感動することは、時代や地域を超えて人類に普遍的だが、美の表現は信仰や労働や遊びと溶けあっているのがふつうだ。古代ギリシア哲学に「真」「善」「美」の区別があったが、「善美」はよくセットにされていた。キリスト教のもとで、神から授けられた理性による判断、「真」や「善」と、感情による判断、「美」とを切り分けたのは、ドイツの哲学者、イマヌエル・カント『判断力批判』(1790年、前半)だった。イタリア・ルネッサンスの巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチは王侯貴族の注文に応じる職人だったのであり、彼を大芸術家と誰しもが認めるようになったのは、産業社会の発展につれて職人の仕事の大部分が労働者のものになり、美を目的とする「芸術」の専門家が生まれてのちのことである。その習慣がひろがるのにも歴史と地域差がある。江戸後期の絵師、葛飾北斎を、19世紀後半、フランスのエドモン・ド・ゴンクールらは、現実性と幻想性を兼ねそなえた「理想的な芸術家」と称賛した。それに賛同しつつ、「それなのに日本では身分の低い職人で、貧乏な暮らしをしていた」とつづける人もいた。

1-5 著作の分類法

中国では技術全般のうち、士大夫(官僚層)が身につけるべきものを「藝」、専門技術者のものを「術」と呼び、あわせて「藝(と)術」だった。技術者も正史のうちに登場するので、地位はかなり高かった。文による藝が「文(の)藝」で、同じ意味で「藝文」という語もよく用いられ、「武藝」と対比された。「文藝」には詩も入る。学問の性格を強調するときに「文学」を用いたようだ。その公式の内部分類は、「経」(儒学を中心に仏教などの經典類)、「史」「子」(諸子百家など諸思想)、「集」(詩文のアンソロジー)だった。そのほか、文例集ないしは百科事典的な「類書」と呼ばれる書物では、項目による分類が行われた。

天皇家の命令で編まれた古代日本の「正史」(六国史)は、漢文で記されているが、中国の正史とちがって、最初の『日本書紀』から仏教について記している。類書の分類は、たとえば橋成季『古今著聞集』(1254年)が平安中期から鎌倉初期に至るまでの説話700余編を、神祇・釈教・政道忠臣・公事・文学・和歌・管絃歌舞・能書・術道など30編に分けてまとめている。先頭に日本の神道の「神祇」を立てている。「文学」は漢詩文である。このようにすれば、日本人の著作で日本の「史・子・集」は編める。が、いかんせん、「経」にあたるものは中国の借りものである。日本の「文学」はつくれなかった。

それとは別に、漢詩と和歌をひとつのジャンルのようにあつかい、「詩歌」と併称する習慣も古くからあった。批評も古くからあった。経書に注を付し、解釈をめぐって論じたり、仏教と儒学などの教えを比較して優劣を説いたり、詩歌の巧拙を判定したりした。『源氏物語』や『枕草子』などの価値や、江戸時代には民衆の楽しむ小説や俳諧まで技巧が論じられ、演劇の評判記も役者の姿形から演技、筋書きや装置にもおよんだ。中国、明末の「古典に帰れ」という掛け声ではじまる古文辞学や考証学の影響を受け、さまざまな事物の起源を探索し、仏教の經典間の関係を論じることも行われた(民間の儒者、富永仲

基の「加上の説」。「類書」の分類も応用され、^{はなわほきいち}塙保己一の編集した『群書類聚』(1793-1819年)は神祇、帝王や管弦などと横並びに、伝(伝記)・消息(手紙)・和歌・連歌・物語・日記・紀行などを分類している(明治期の国家事業として編纂された『古事類苑』も、類書の分類法を土台に、日本流に再編している)。

江戸時代に戦国時代の下剋上の風潮が薄れると、また別の分け方もできた。公家や武家(大名・旗本)、高級武士の嗜む「雅」と、農工商層の「俗」の世界は明確に区切られ、流通経路も分けられた。が、逆に、大名や武士に民間の三味線の音曲を好む者が増えたり、公の制度や規範を破ったりする動きも盛んになった。中国では、各分野の歴史(各ジャンル史)は正史のなかでまとめられる習慣だが、日本ではその約束がなかったので、江戸時代には日本の儒学と漢詩の歴史をまとめる書物も編まれた(江村北海『日本詩史』1771年)。19世紀前期には、詩歌と、下賤なものとされていた俳諧を芭蕉に限って並べて論じ(津阪東陽『夜航余話』下巻)、古代の物語と浮世草子・読本・戯作類・浄瑠璃台本とをあわせ、「物かたり」というジャンルにまとめることも行われた(曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』)。それでも、今日の言語芸術にあたる括り方は生まれなかった。

1-6 訳語「文学」の成立

では、どうして英語“literature”と漢語「文学」はたがいに翻訳語になったのか。今日の英語の大きな辞書には、広義と狭義のあいだに、「立派な著作」(polite literature)という中義の意味を載せている。これが鍵を握っている。

英語に対する訳語の多くは、まず19世紀半ばに香港や上海で、キリスト教宣教師たちと中国人の若き知識人(秀才。科挙試験で優秀な成績をあげたが合格に至らなかった者)との協力によってつくられた。英語“literature”について、中国でつくられた代表的な辞典から例示してみよう。ロブシャイド『英華辞典』(香港、1866-69年)では“literature”に、文・文学・文字(wenzi)・字墨(zimo)という訳語をあてている。19世紀半ばの英語“literature”は、文字で書かれた著作全般を意味していたから、中国語にとって多義的な語だった。これに限らず、一般に中国語の方が意味の分岐が細かい。それに対してメドハースト『華英辞典』(上海、1864年)では、「文学」が“polite literature”と訳されている。洗練された、ないしは高級な著作の意味である。19世紀ヨーロッパではナショナリズムが高揚し、それぞれの国の立派な著作が選ばれ、各国の「文学史」が編まれはじめ、“literature”といえ、この意味が盛んだった。その範囲は、キリスト教の神に関することば(神学)に対して、人間のことばの領域をあつかう人文学(belles-lettres, the humanities)である(のちに、人文科学と社会科学に分かれる)。

これと中国語の「文の学」の意味が釣りあったので、たがいに翻訳語になった。中国では現世主義の強い朱子学による科挙(官吏登用試験)が存続しており、これがヨーロッパの人文学と意味の範囲も社会的地位もよく似ていたからである。これらの翻訳語を載せた辞書が幕末の日本に輸入され、洋学者たちが「日本の文学」を考えはじめた。日本語の翻訳語の辞書も出され、20世紀にかけて何度も改訂を重ねてゆく。そのあいだに日本で工

夫された訳語もかなりある。

先に述べたように、専門家たちは1910年ごろ、言語芸術を指して「文学」の語を用いるようになり、明治期から活躍した人びとは、その後も中義の「文学」を用いつづけ、そのなかの言語芸術を尊重する態度が優勢だった。その用法が今日まで「日本文学史」の「文学」に響いているわけだ。つまり明治期になって、それまで「文学」と呼ばれていた漢詩文も、「文学」としてあつかわれてこなかった日本語で記された和歌や俳諧・物語・小説や戯曲も、みな同じ「文学」という袋に入れるようになったのである。嘘を嫌い、フィクションの価値を認めない朱子学が支配する中国より、多様な価値観が飛び交う日本の方が西洋の価値基準を受け入れやすかった。そこで、中国で近代的概念による「中国文学史」が編まれるより前に、日本で「日本文学史」が、そして「中国文学史」も、まず日本で編まれはじめたのである。

2 「日本文学」の特殊性

「日本文学史」は、ヨーロッパの「人文学」を受けとめ、つくられたコンセプトだった。今日でもヨーロッパ各国の「文学史」は、人文学の範囲をカバーするのがふつうである。だが、西欧各国の「文学史」と「日本文学史」とでは、言語・宗教・民衆文化のあつかいの3点で大きなちがいがあつた。日本では、それを受けとめる土台がちがった。

「文学」の語は、最初は、英語“literature”の広義を受けとめ、学術全般の意味で用いられた。これは、西洋の天文学や物理、化学などを、幕府が公認する朱子学で受けとめた江戸時代のなごりである。天理（自然の法則）を至上原理とするので、どんな学問もそのなかにふくめることができたのである。たとえば自由民権運動が生んだ政治小説、末広鉄腸『雪中梅』（1886年）に、百年後の日本を想像し、「教育全国に普及して、文学の盛んなる、万国其の肩を比ぶる者なく」云々と登場する。この「文学」は学術全般を意味するだろう。が、このころには、自然科学と人文学を区別する習慣が根づき、「文学」といえば人文学の範囲を指すようになっていた。4年後には、その用法によって三上参次らの『日本文学史』が編まれた。だから19世紀末に芳賀矢一がこれまでの「日本文学史」の対象は「学問全般」といったのは精確でない。

明治前期から官報には、日本の「文学」にあたる語が現れているが、最初に「日本文学」という語を用いて、これを論じたのは、福地桜痴が自ら率いる『東京日日新聞』に書いた「日本文学の不振を嘆ず」（1875年）だろう。その「文学」は、人文学全般と読み書き能力の教育をふくんでいる。幕末に幕臣としてイギリスやフランスに渡り、1870年の岩倉使節団にも加わった彼のヨーロッパの概念把握はかなり正確である。ヨーロッパでは、その後、“literature”と作文や修辞学（rhetoric）の切り分けが進む。日本でも、高田早苗『美辞学』（1889年）あたりから「修辞学」は別分野になる（アメリカでは20世紀初期まで、この分岐は起こらなかった）。

英語“literature”の中義について、もう少し詳しくいうと、それぞれの国語（national

language) で記された著作、そのうち手本とされるような優れたものを指していた。人文学 (the humanities) は『聖書』を筆頭とする「聖なることば」に対して、人間に関する優れた著作を意味する “belles-lettres” (もとフランス語) がもとになっていた。今日、フランスの「文学史」の教科書には、20 世紀の巻に映画を入れているものもあるが、この基本線が崩れたわけではない。

2-1 バイ・リテラシー

西欧近代の言語ナショナリズムに対して、「日本文学史」は漢文で記された著作も組み入れている。天武朝期に編まれたとされる『古事記』には、一部の語句にはヤマトコトバの発音どおりに記す万葉仮名方式を取り入れているが、全体は崩れた漢文で記されている。『日本書紀』には、古いお触れ書きなどに崩れたものが入っているが、全体は、当時の中国の首都、長安の言葉で記されている。『風土記』は、各地方の地誌で、『尚書 (書経)』中「夏書」寓貢篇を祖形にしたと思われるが、格調の高いものや崩れた漢文で記されている。それぞれの地方の書記官の能力による差だろう。その他、平安初期の『懷風藻』(751 年) にはじまる勅撰漢詩集、平安中期の漢詩文集『本朝文粹』、江戸幕府が編んだ編年体の史書『本朝通鑑』(1670 年)、水戸光圀の命で編集をはじめた水戸藩の『大日本史』(1906 年完成)、幕末の尊王運動に火をつけた頼山陽『日本外史』(1827 年、公刊 1829 年) などを「日本文学史」に載せるのがふつうである。

先にもふれたが、三上参次・高津楯三郎合著『日本文学史』は、西洋諸国の「文学史」が自国語の作品に限っていることを承知しながら、「国学者流はとらない」と述べていた。「国学」は、中国の風習に染まる以前に「純粋な日本文化」があったと想定し、それを復活させようと、漢文を排斥する本居宣長らの学問の流れを指し、「古学」などまちまちに呼ばれていたが、明治前期に、この呼称が定着した。三上参次らが、漢文を排斥しない理由は、何より、皇室と日本国家の起源を記した『古事記』『日本書紀』を巻頭に置くことが必要だったからだ。彼らは日本が西洋列強より長い文学史をもつことを誇っている。

このころの「日本文学史」は、未来の日本を担う中学生に向けて編まれた。明治政府は、幼児期からの漢文の素読 (意味もわからず、日本語順に読み下す方式) はやめ、近代ヨーロッパにならって、尋常小学校では自国語だけにした。が、エリート育成のための中学校では (中学進学者の多い高等小学校でも)、英語ほか外国語 (独・仏) を課し、同時に「国語」のなかに必須科目として「漢文」を組み入れた (学制、1872 年)。西洋の概念を理解するにも漢文学習は不可欠だった。大学入試にも漢文と欧文のリテラシーが問われた。こうして、日本の歴史を通じて漢詩文の学習が最も盛んな季節が訪れた。日本の人文学が漢文で記された歴史を重んじて当然だった。「漢文」の著作を除くと、知的著作が極端に減ってしまうことも理由だろう。古代から、知的著作は漢文が、感情の表出は和文が受けもつという大きな役割意識が流れていたからである。

日本の知識層は、時代によって濃淡は異なるものの、幕末までバイ・リテラシーだった (白文の読み書きが要求された。話せるかどうかは別)。多くの人は、漢文の原文を眺めなが

ら、訓点を頼りに読んだが、慣れれば、頼る頻度は減る。原理は英語を頭のなかで翻訳しながら読むのと同じである。漢字・漢語に慣れているだけ、それよりはるかに楽だった。幕末からは、それに英語などヨーロッパ語が加わった。

日清戦争後、暗誦と作文が「漢文」の必須科目から外され、作文能力は極端に落ちるが、中学校卒業相当の「国語」力には、白文（旧漢字体）を読み下す（即座に翻訳する）能力が必須とされた。なお、中学卒業程度の学力をもつ者の同年齢人口比は、明治後期で3-5%（陸軍壮丁調査のうち識字率調査による。満20歳の男子が対象）。中学に行けなくとも独学で大学の講義録などを読んで勉強する人びとが、進学者とほぼ同数いた（昭和期、とくに日中戦争による景気回復期には、中学進学者が13%におよぶという）。言語芸術の概念と文化ナショナリズムが強くなり、芳賀矢一流に和文の感情表現中心に傾いても、『記紀』を除いた「日本文学史」などありえない。漢文の著作は排除されなかった。

2-2 宗教との関係

ヨーロッパ諸国の文学史（人文学史）と日本文学史のちがいの第二は、宗教との関係にある。キリスト教は民族や国家を超える普遍主義をとり、「カエサルのはカエサル」ということばに示されるように、政治とは無関係という立場である。逆にいうと、キリスト教を排斥しない限り、どんな政治とも同居する。この「聖なることば」に対して、ヨーロッパ近代の人文学は「俗なることば」の世界、ナショナリズムとともにあった。ルネッサンス運動は、古代ギリシアの異教の神々や精霊を、信仰や宗教性は抜いて、芸術という枠のなかで復活させた。精神の無限の解放を求めるロマン主義も、崇高な感情を大切に、キリスト教信仰の感情もふくめるが、教義とは一線を画す。なお、欧米各国の「文学史」に、聖書の自国語訳や聖職者の説教などが見られるのは、俗世間に影響を与えた思想や修辞法の観点からである。

中国では、どうだったか。朱子学は天を敬い、天理を第一にする。が、もともと儒学は現世主義が強い。聖職者もいない。古来、祖先崇拜と強く結びついている。ところが、キリスト教を基準にした概念では、祖先崇拜は宗教の範疇に入れられない。儒学が宗教かどうか、いくら議論しても決着がつかない。そういう性格がヨーロッパの世俗世界をあつかう人文学と似ていた。逆に、魂の救済を説くキリスト教は民衆の心をとらえ、19世紀半ばに大規模な太平天国の乱を生んだ。

日本では、古代から天皇家が祖先崇拜のために神道・儒教・仏教（これらの呼び名も明治前期に固定された）を祀^{まつ}っていた。それらは結びつき（習合）、とくに平安時代にはインドの仏が日本では神になって現れるという本地垂迹説（権現思想）を盛んにした。江戸時代の知識人のあいだには、神道と儒学がたがいに迷信のように退けあう場面も生まれたが、民衆の生活では、神社は村の結束の場、寺は各家を檀家とし、大きな勢力になった吉田神道や太陽の恵みに感謝する「天道思想」は神・儒・仏の根はひとつとする三教一致論をとり、さまざまな信仰が並行し、また入り混じって存続していた。

幕末、1865年ごろ、外交文書で、たがいの信教の尊重を取り交わし、日本における信

仰もキリスト教と横並びの関係に置かれ、そのなかで“religion”の訳語「宗教」も誕生した。が、日本の神道は教祖をもたない。最も宗教らしい宗教は仏教だが、東アジアでは仏教も儒学と同様に、王家や家々の祖先崇拝に寄りそって教えをひろめた。

『古事記』や『日本書紀』が「日本文学史」の最初に登場するのは、学問制度との関連では、日本の人文学が「日本の神学」を組み入れたかたちになったことと密接に関連する。それには、日本の近代国家制度と神道の関係が働いた。明治政府は教学聖旨（1879年）を発し、知育より徳育尊重の方向に切り替えようとし、やや論議があって、尋常小学校の「修身」を西洋式から儒教式に改めた。諸外国から求められてきた信教の自由を認めるにあたっては、1882年ごろから神道すなわち、皇室の祖先崇拝は「宗教ではない」という見解を出し、宗教からの教育の自由を求める声に対しても、その「論理」で乗りきってゆく。神道を「諸宗を超える宗教」にしたのである。以後、日本の「宗教」概念は揺れつづける。

そして、帝国憲法（1889年発布）第三条に天皇の「神聖不可侵」をうたい（王権神授説を条文に入れたプロシャなどの国法を参照し、幕末に高まった神がかった国体論と折衷）、教育勅語（1890年）を発して、皇室崇拝と江戸時代の武士層に培われてきた日本式儒学の中心徳目、「忠孝」を組み合わせて国民教化の指針とした。このころ、加藤弘之は「皇室は臣民の宗家」「忠孝一本、万邦無比の国体」を唱える（家族国家論）。こうして神社の国家管理とともに「国家の宗教」（第二次大戦後の用語では「国家神道」）の基礎がつくられた。王室の宗教、「国家宗教」はヨーロッパに珍しくないが、それをいわば「諸宗を超える宗教」とし、国民全体の祖先崇拝とするのは先例がない。まさに「万邦無比」である。また『日本書紀』をはじめ、古代の正史（六国史）は、中国の正史とはことなり、仏教の動きも記している。こうして日本では「聖なることば」の領域をためらうことなく、人文学のうちに組み入れることになった。「国家神道」は靖国神社などを通じて、次第に内実をつくり、皇室崇拝は小学校教育を通じて浸透してゆく。『古事記』『日本書紀』を最初に置く「日本文学史」も、これに一役買った。この制度によって、第二次世界大戦期には、人文学全体に「国家神道」が浸透することになる。

2-3 民衆文芸の位置

ヨーロッパ諸国の人文学と「日本文学」のちがいの第三は、「日本文学史」は創出されたときから、民衆文芸を組み入れていたことである。英語“literature”の中義は“polite literature”で、貴族文化を基盤にしたアカデミズムに支えられていた。イギリスの高等教育ではギリシア語・ラテン語の古典重視が続き、大学に「自国文学」の科目が開かれるのは20世紀に入ってから。文芸批評はジャーナリズムの仕事だった。フランスでも、イポリット・テーヌは、唯物論に接近して、主流派からアカデミズムから追いだされたときに、『イギリス文学史』を執筆した。

中国の知識層も虚構の物語や巷の噂話の類を楽しんできたが、朱子学は詩を嗜むことさえ「玩物喪志」（物にとらわれ、志を失う）とたしなめる。まして民衆の歡ぶ虚構の物語類

は嘘の世界として退けた。それゆえ、中国では、精神の無限の自由を求め、想像力による創造性を重んじるロマン主義による西洋のフィクションは受け入れがたかった。

それに対して、先にふれた福地桜痴「日本文学の不振を嘆ず」は、江戸時代の民衆（people、被支配層）のあいだに行われた連歌俳諧、読本や戯作、浄瑠璃や歌舞伎の台帳を、日本の詩・小説・戯曲とした。田口卯吉『日本開化小史』（1872-82年）も、儒学と戯作をともに「文学」と呼んでいる。三上参次らの『日本文学史』もそうだった。明治前期の開化主義者が民衆の楽しむ文芸を「日本文学」に組み入れることをためらわなかったのは、彼らのリベラリズム（平等主義）と、ヨーロッパでブルジョワ層（都市の市民や農村事業家層）、とりわけ19世紀後半にリテラシーを身につけた婦女子が好む小説類が盛んになり、「国民文学」（national literature）の考えがこれらの地位を次第に押し上げてゆくときだったからだろう。なお、「国民文学」は、どこでも国民みんなが読んでいるようなものをいうが、アメリカではマーク・トウェインの作品など平易なものを数える。その基準は国により、また時代によって変化する。

幕末から明治を通して活躍した洋学者たちは下級武士の出身者が多く、歌舞伎や浮世草子の類、戯作、俳諧など多彩な町人文化になじんでいた。彼らがそれらに、ヨーロッパのブルジョワ層に盛んになっていた“popular literature”（民衆文学）との類似性を見いだすのは容易なことだった。これらいくつもの理由が重なって、先にヨーロッパの「人文学」の概念を受けとめた中国より先に、日本で言語芸術の概念が受け入れられたのである。

3 帝国大学の創設

伊藤博文は1885年12月に初代内閣総理大臣に就任するや、憲法を整える前に、まず旧幕府の洋学系学問所を集めて創設された東京大学（1877年創設）を官吏およびテクノクラート養成のための大学として位置づけなおし、1886年に帝国大学として抜本的に改革し、工部省を廃止し、その内部に工科大学を設置した（1884年に東京大学内に設立した工芸学部と合併）。3年後には、農科大学を農商務省から移管。これは、今日、当時の総合大学としては極めて「実用主義的」で「先進的」なものと評価されている（たとえば、寺崎昌男『東京大学の歴史』講談社学術文庫、2007年、237頁）。ドイツでは専門大学の創設が相次いでいたが、当時のヨーロッパやアメリカのアカデミズムの主流は、工学はカレッジが担うものとしていたからである。

この制度改革には、伊藤博文が1882年に憲法事情研究のためにヨーロッパを訪れ、ウィーンに2ヵ月ほど滞在し、ローレンツ・フォン・シュタイン（Lorenz von Stein, 1815-90）にヨーロッパ諸国の憲法および国家体制について事情を聞いたことが響いていることは、すでに定説といえよう。

だが、そこに至る道筋を考えるなら、ヨーロッパにおけるエネルギー一元論の台頭が直接、そのドライヴィング・フォースとして働いたことになる。

宇宙の動きのおおもとがエネルギーだという考えは、人びとの世界観の根本に響き、19

世紀後半から 20 世紀前期の学問全体に決定的な役割を果たした。

近代ヨーロッパで「エナジー」の語は、英語からひろがり、何かの原動力のような意味で、精神面にも用いていたが、物理学では物体の運動や衝突と関連して「力」が、化学では熱素（カロリック・流体）を想定して「熱」が研究されていた。1853 年に、スコットランドのグラスゴー大学のウィリアム・ジョン・マックォーン・ランキンが位置エネルギーなどをふくめ、熱・力・仕事量を統一的にはかる概念として確立。閉鎖された空間では、エネルギー総量は一定で変わらないこと（エネルギー保存則）、ひとつの機関が仕事をすれば、必ず熱が外へ吐き出されるので、永久に働きつづける機関はありえないこと、分子の拡散のランダム度（でたらめさ）の尺度、エントロピーは増大するばかりであることなどが次つぎに法則として認められていった。産業革命を支えてきた蒸気機関や進展する電気についての工学（engineering）は、理学（natural sciences）の一分野として認められ、イギリスではカレッジが、ドイツでは専門大学が次つぎにつくられてゆく。

この動きを徳川幕府から派遣され、1862 年から 65 年までオランダのライデン大学にヨーロッパの学問について研究に行った西周は確実につかんでいた。彼が帰国後に開いた私塾、育英社で行った講義では、イギリスでエネルギー還元主義が盛んになっていると説いている（『百学連環』。ただし刊行は戦後 1960 年）。西周も、最初はヨーロッパの自然権思想を朱子学の「天理」で受けとめていたが、自然と人為の根本的なちがいに気づき、宗教は人間心理の産物と無神論的に考え、自然と心の働きを混同するところに迷信が生じる、文明を進めるにはその区別を立てることが大切と考え、日本の学問制度を整えることに力を注いでいった。

西周の渡欧より 1 年遅れ、長州藩の命令でイギリスに赴いた伊藤博文ら 5 人組も、この新たな機運に出会った。伊藤は帰国後、1870 年に工部省のトップ（工部卿）につき、他の 4 人とともに殖産興業の施策を次つぎに打ち出し、実施に移してゆく。1873 年には先に紹介したランキンの弟子のひとり、ヘンリー・ダイアーほか 7 名を招き、工部省のもとに研究所、工部寮を設置、76 年には工部大学校とする。1882 年、伊藤博文は国家体制の研究のためヨーロッパを視察、ウィーンにドイツ法哲学、フランス法制史を学んだローレンツ・フォン・シュタインを訪ね、ヨーロッパ先進国の憲法・大学制度などについて講義を受けた。1885 年 12 月に初代、内閣総理大臣に就任すると、官僚や広い意味でのテクノクラート養成を主眼とする帝国大学の創設（1886 年）に乗り出した。工部省を廃止、工部大学校を帝国大学工科大学とした。1889 年には農科大学が農商務省から移管された。農商務省は早くからドイツ人のお雇い外国人を招いており（アメリカの牧畜中心の大規模経営を導入した札幌農学校は、拓殖省の管轄）、ドイツで化学と生物学による農芸研究が総合大学で行われはじめたのを導入した。この実学に力を注ぐ編制は、学問のためのヨーロッパの大学と異なり、とくに工科大学は世界にはるかに先駆け、富国強兵の根幹を担った。土木工学の博士を多く出したのもユニークである（ただし、20 世紀に入って、建築は「芸術」のひとつに位置づけられる）。

結 び

知のシステムは、学芸諸ジャンルの概念の相互関係、概念編制 (conceptual system) に端的に示される。それを支える価値理念とそれを担う実体である文化諸制度の変遷史とをあわせ、概念編制史と呼ぶ。なお、概念は、知識層一般に共有されているものをいい、それぞれに創始・流通・定着・変容が問われる。概念編制史は文化史の根幹をなすが、語彙史、研究教育制度やメディア史の研究とたがいに支えあう関係にあり、方法を身につければ、誰でも参加できる。

そして、ここであげたものの下位概念や諸ジャンル、人文学であれば「宗教」概念 (諸宗教を超える国家神道の展開)、「歴史」概念 (法則性をもつか生成発展か)、いわゆる文理にまたがる領域では、生物進化論やエネルギー概念の受容史は「生命」観や「自然」観の根本概念に関わるものであるが、儒学系の「天理」によって受け入れられたことなど、依然として未開拓のまま残されている。これらの研究は、既存の各ジャンル史および学説史研究に再検討を迫ることはまちがいない。

「文学」概念の変化について、もうひとつ大事なことがある。20世紀に入るところから、芸術至上主義が台頭し、芸術の宗教・自然科学との関係が根本的に変わる。何よりも芸術が大事というだけではなく、芸術がどんな宗教も自然科学も抱えてゆくという考えで、これによって、真・善・美の美を担当するタテマエの近代的芸術観からの脱却が起こる。密接に関連するが、象徴主義は「一種の宗教」を名のる。芸術をまるで既成宗教に代わるもののように考える人びとが出てくる。そして、たとえばヒンドゥー神秘主義をうたうインドの詩人、ラビンドラナート・タゴールがノーベル文学賞を受賞 (1913年)、岡倉天心『東洋の理想——日本美術を中心に』(1904年)が道教の「気」を尊重する態度もつくられる。が、他方で、芸術から宗教性を排除する近代主義の流れも存続する。たとえば能楽研究の第一人者、野上豊一郎は、能楽が宗教芸能としての性格を強く残し、近代芸術でないことをよく承知しながら、宗教性を考慮しない立場をとった。

そして、これらは第二次大戦後の再編を経て、今日に至っており、今日のわれわれを規定している。この再編成過程の総体の研究は、今日の知的システムを未来にひらくために必要不可欠な前提であり、かつ、東アジアの国際共同研究の展開によってこそ進展を見るのである。